

## Nathanael West 研究

### — *The Dream Life of Balso Snell* (その1) —

今井夏彦

1940年12月22日午後、Nathanael West は妻 Eileen と共にメキシコ国境での一週間の狩猟旅行を終え、カリフォルニア州をロス・アンジェルズに向かって北上中自動車の運転を誤り、夫婦とも帰らぬ人となってしまった。アイリーンの腕時計の針は2:55を指していたという。ウェストは、その37年間という作家として決して長くはない生涯に、*The Dream Life of Balso Snell* (1931), *Miss Lonelyhearts* (1933), *A Cool Million* (1934), *The Day of the Locust* (1939) の4篇の小説を著わしている。いずれの作品も、発表当時はあまり世間に相手にされず、ウェストはハリウッドに出向き映画の脚本を書いて糊口を凌いでいたが、近年になっていちじるしい再評価の兆しを見せている。

筆者は、すでに最初の作品 *The Dream Life of Balso Snell* (以下 *Balso Snell* とする)を除く3篇について述べてきたが、本稿では、この作品を中心に取り上げ、他作品とのつながりにも触れながら、作家ウェストの持つ「ユダヤ性」、「現代性」について論を進めてみたい。ウェストは、*Miss Lonelyhearts* では新聞の人生相談の解答者を主人公にしてその時代とニューヨークの荒廃を嘆き、*A Cool Million* では、*American Dream* を追った若者の悲劇をパロディとして描き、遺作 *The Day of the Locust* においては、ロス・アンジェルズの映画界を背景に現代人の不条理を描き切っているが、第1作の *Balso Snell* では、トロイの木馬の胎内を彷徨う主人公を *surrealistic* な調子で語っている。

1924年は、ウェストにとってひとつの転機に当たる年だった。この年ブラウン大学を卒業し、10月には憧れのパリに渡っている。同年同月はまだ

しく、1919年に Dadaism の影響を受けて生まれた Surrealism が盛んになってきた中で、André Breton の著作 *The Manifeste du Surréalisme* が刊行された時だった。そのパリでウェストは、Jean Cocteau, André Gide, Hemingway, T. S. Eliot といった人々に出会ったらしい。(彼の友人が Henry Miller を引き合わせたのが失敗に終わったという。<sup>(1)</sup>) *Balzo Snell* の一部に描かれている街並みやアパートなどの建物は、パリでのウェストの生活をうかがわせている。

ただ、Surrealists の目標とする政治的な面では、ウェストは *A Cool Million* でファナズムへの脅威を表わしたものの、あまり積極的ではなく、彼らの表現方法をのみ取り入れた、と言えよう。

ウェストは、2年後の1926年1月に帰国している。すぐに叔母の関係で、ニューヨーク州マンハッタンの東24番通り145の Kenmore Hall Hotel で assistant manager の仕事に就くが、ここで与えられた勤務時間の多くを学生時代から書き始めていた *Balzo Snell* の推敲に当てていたようである。1930年当時、彼はこの作品を *The Journal of Balzo Snell* と呼んでいた。“Journal (日誌)” と名付けたのは、1920年代後半におけるウェストの日々の、芸術と人生に対する思いを綴ったものだったからである。

まだ名のない前衛作家“*avangarde writer*”にすぎない彼は、いざ出版の段となって、いわゆる“*genteel tradition*”の名残りのある大手の出版社を避け、2、3の小さなところを狙うが、猥褻、瀆神などの理由で断られてしまう。最後に、“*Contact Editions*”という条件付きで、当時その編集をしていた William Carlos Williams に受け入れられ、1931年 Moss and Kamin 社から出版される運びとなった。定価は3ドルで500部刷られた。

興味あることに、この *Balzo Snell* の宣伝のための小文をウェスト自身が書いているが、その中で彼は英語とフランス語のユーモアを比較している。

English humor has always prided itself on being good natured and in the best of taste. This fact makes it difficult to compare N. W. West with other comic writers. as he is vicious, mean, ugly, obscene, and insane...

---

With the French, however, West can well be compared. In his use of the violently disassociated, the dehumanized marvelous, the deliberately criminal and imbecilic, he is much like Guillaume Apollinaire, Jarry, Ribemont-Dessaignes, Raymond Roussel, and certain of the surrealists.<sup>(3)</sup>

つまり、ウェストには、「性質も趣味も良い」英語のユーモアよりも、「不道徳で、卑しく、下品で、猥褻で、正気とは思えない」激しいフランス語のユーモアの方が相応しい、ということになろう。また、English humorの性質が、ウェストを「他の comic writers と比較することを困難としている」と述べることによって、自らを comic writers のひとりと決めつけている点も注目に価いしよう。<sup>(4)</sup> 次にウェストは、主人公 Balse Snell にまつわるいくつかのエピソードを並べ、おしまいにドイツの Dadaist である Kurt Schwitters の言葉を引用している。

All of these tales are elephantine close-ups of various literary positions and their technical methods; close-ups that make Kurt Schwitters' definition, "Tout céque l'artiste crache, c'est l'art" seem like an understatement.<sup>(5)</sup>

ウェストが、ここで "Everything that the artist expectorates is art." 「芸術家が吐き出すもの(痰・つば)はすべてが芸術である」という Schwitters の定義を持ち出してきたのは、作品の中で Western Civilization を否定し、従来の art への攻撃を仕掛けると共に、自らの新しいスタイルを確立しようという、ウェストの果敢な挑戦を示しているものと思われるものと思われる。(…West's book (*Balzo Snell*) would be an act of defiance, not a gesture of despair.<sup>(6)</sup>) たしかに、そこには Dadaism や Surrealism の影が見られよう。と同時に、ウェストがあるインタビューで「*Balzo Snell* は "a protest against writing books"<sup>(7)</sup> として書かれた」と語ったことから必然的に考えられることは、この作品により彼独自の「芸術」を打ち建てようという、並々ならぬ決意の表明ではないだろうか。その意味では、この小

文はいわばウェストの作家としての意思を明らかにした声明文であり、*Balzo Snell* という作品以上に、その後のウェストを示唆していると言えよう。

しかしながら、1929年の The Great Depression の直後のアメリカという社会背景を考慮に入れば、この小説の売れ行きが振るわなかったことは、容易に想像がつく。それでも“Contempo”と“New Review”のふたつの雑誌が書評に取り上げてくれ、“New Review”の中で、ウェストの朋友で作家志望の Julian Shapiro は、“genteel critics”には *Balzo Snell* が理解できないだろうと揶揄し、さらに、“West’s book (*Balzo Snell*) was a good sort of literary fooling, a nonsense both above and below what the critics for.’ ‘This book,’ he concluded, dadaistically, ‘doesn’t try to explain.’”(8) と結んでいる。

ある作家の処女作は、たとえその作品が未熟なものであっても、それに続く作品に濃い影響を落としているとよく言われるが、*Balzo Snell* もその例外の域を出ない。どの評者も、このことと、主人公 Balso の名の由来、そして James Branch Cabell (1879-1958) の出世作 *Jurgen* (1919) との比較については、必ず言及している。まず、Balso という各前について、Victor Comerchero は Balso—Balso Snell (下線は筆者) という頭文字の double-entendre であることを指摘し、また Randall Reid は作品の scatologic な面から “asshole snell” のもじり (Branch Cabell とのオーバー・トーンも考えられるが) だと述べ、また J. F. Light は同じように scatology から “balls of Snell” との掛け言葉だとし、さらにウェストの伝記の著者 J. Martin によれば、ブラウン大学時代にウェストがチームから除外されたときのバスケットボール部のコーチ Walter Snell への復讐ということになる。

次に、*A Cool Million* が Horatio Alger の一連の成功物語のパロディーであったように、*Balzo Snell* も、1920年代から30年代にかけて多くの読者の心をとらえた *Jurgen* を意識して書かれたものであることは明らかである。*Jurgen* の主人公 Jurgen は、詩心をもつ中年の質屋の主人である。あ

る日突然姿を消した妻を探しに出かけるが、その探索がそのまま彼の青年時代への旅となり、天国と地獄をも含む様々な土地で様々な冒険をし、昔の恋人や風変わりな人々と出会う。最後に家に帰ってみると、妻はすでに戻っていたという伝奇ロマンスである。結局、この過去への旅によって、Jürgen は“all is vanity”ということを確認する。作者 Cabell は、想像力を駆使しながら読者を古代や中世の伝説の世界へと導いてくれる、その世界をさまよう主人公の姿を、やや官能的に、アイロニーも混じえて描いてゆく。この小説は、当時 The New York Society for the Suppression of Vice により書店の店頭から締め出され、出版社側と裁判沙汰になったというおまけまでついている。

しかしながら、この作品の評価については賛否両論に分かれ、なかでは H. L. Mencken の絶賛を受けている。<sup>(9)</sup> いずれにしても、かなりの問題作であったことには間違いがない。ウェストの妹 Laura と結婚した学友 Joseph Perelman によれば、ブラウン大学のキャンパスで最初に Jürgen を読んだのがウェストラしく、<sup>(10)</sup> 確かに、Balso 自身のキャラクターや小説のストーリー等の点で、Jürgen から学んだことが多かったはずである。たとえば R. Reid は、主人公 Jürgen と Balso はともに中年の詩人であること、旅を“by entering a dark cave”によって始めていること、青年時代への回帰と失われた愛を求めていること、などの共通点を挙げている。<sup>(11)</sup> その意味では、Balso Snell を Jürgen のパロディーと呼ぶにはややためらいが生じる。むしろ Jürgen に触発されるものが多かった、と解釈すべきであろうか。あるいは、ウェストが先人の作品を功みに利用している、と言えるかもしれない。このことは、後述する James Joyce や Dostoevsky の作品の場合にも、同じように指摘できよう。

ウェストは、エピグラフに Marcel Proust の傑作「失われた時を求めて」における Bergotte の言葉を引用し (“After all, my dear fellow, life, Anaxagoras has said, is a journey.”), この小説をピカレスク風に仕立てているが、Pilgrim's Progress や The Divine Comedy のように、主人公 Balso の旅は何らかの illumination か purification を持たらすわけではなく、勿論

revelation にはほとんど遠く、ただ単に“dream within dream”として目的や方向性なく続き、“an unproductive orgasm”に終るだけである。この点においても、ウェストは古典的形式を諷刺しているわけである。<sup>(12)</sup>

さて、Balso の dream life は、トロイの街外れで「木馬」に遭遇し、anus からその中に入りこみ、胎内で様々な人々に出会い、the sexual climax で終わる。ウェストは、すでに1924年に、「トロイの物語」のパロディーとしてこの小説の構想を抱いていたらしい。そしてこの木馬は、もともとなかなか陥落しないトロイの人々を欺くために、ギリシャ軍が戦略として考案したものだが、Balso Snell の場合には、「夢を欺き」さらに「夢で象徴される人生を欺く」シンボルとして用いられている。<sup>(13)</sup> ウェストは、否定的なイメージを喚起させるシンボルとして「馬」を度々作品の中に登場させている。<sup>(14)</sup> *A Cool Million* では、暴れ馬を取り押さえた主人公 Lemuel Pitkin に口先だけの讃辞を送るサギ師 Sylvanus Snodgrasse が、アメリカは“the symbolic horse”を持つべきだと主張している。また *The Day of the Locust* では、Tod Hackett が訪れるシナリオ・ライター Claude Estee の邸宅のプールの中に、実物大に作られた馬のグロテスクな死体が置かれてある、といった具合である。しかし、極め付けは、同じ Tod がふらりと入り込んでしまったハリウッドの撮影所（Tod はここを「夢の投棄場」「a dream dump」と痛烈に批判している）のがらくたの中に、彼が「トロイの木馬」「the wooden horse of Troy」を見つける条りであろう。<sup>(15)</sup> ここに至って、ウェストの辛らつな諷刺は絶妙な冴えを見せている。

木馬の腸のなかに入ると、Balso は陰うつな雰囲気吹き飛ばそうと歌をつくる。

Round as the Anus  
of a Bronze Horse  
Or the Tender Buttons  
Used by Horses for Ani

---

On the Wheels of His Car  
Ringed Round with Brass  
Clamour the Seraphim  
Tongues of Our Lord

Full Ringing Round  
As the Belly of Silenus  
Giotto Painter of Perfect Circles  
Goes... One Motion Round

Round and Full  
Round and Full as  
A Brimming Goblet  
the Dew-Loaded Navel  
Of Mary  
Of Mary Our Mother

Round and Ringing Full  
As the Mouth of a Brimming Goblet  
The Rust-Laden Holes  
In Our Lord's Feet.  
Entertain the Jew-Driven Nails.

肛門のように丸く  
ブロンズの馬の  
馬たちの尻の穴に使われる  
柔らかいボタンのように丸い

そのくるまの車輪は  
真ちゅうの輪が取り巻き  
天使のざわめき  
我らが主の御言葉

ただ響き渡る  
シレノスの腹のように  
完全な円を描く画家ジョット  
描け...ひとつの動く輪を

回りながら満たせ  
回りながら満たせ  
なみなみと注がれた酒杯のような  
露で満ちたへそを  
マリアの  
我らが聖母マリアの

回りながら響き渡らせ  
なみなみと注がれた酒杯の口のような  
錆に満ちた釘穴を。  
我らが主の御足に開いた  
ユダヤ人の打ち込んだ釘を楽しめ。

この歌を見ると、“anus,” “tongues,” “belly,” “navel,” “mouth,” “feet” と身体の部位が多く歌いこまれていることに、まず気付くだろう。次に、“Lord,” “Mary” と Christianity に関するものに目が止まる。そして、Giotto という画家が登場している。さらに、これら三者 (body, religion, art) を「円」circle に結びつくイメージの言葉 (“round,” “button,” “anus,” “wheel,” “ring,” “perfect circle,” “brimming goblet,” “hole,”) を使ってまとめている。art, religion, body の三つは、この作品自体の中心となるテーマであり、circle というイメージの示すものもまた重要な意味をもつ。

Irving Malin は次のように説明している。

It is possible to claim that Balso (and West) is merely sexually



---

oriented, looking everywhere for the good opening, but as we look closely at the circle, we realize that it symbolizes desired perfection. Art, the body, and religion try to give us perfection, immortality, and eternity—they persuade us to give up our special angles of vision, our lines of tension. But they lie, according to West. They merely disguise pain and anxiety.<sup>(16)</sup>

本来であれば、我々にそれぞれ「完全」「不死」「永遠」を与えてくれるはずの art, body, religion が、単なる「苦痛」や「不安」に「姿を変えている」だけにとどまっているわけである。このことは、Balso がこの歌につけようとするふざけたタイトル (“Anywhere Out of the World,” “a Voyage Through the Hole in the Mundane Millstone,” etc.) を取り上げてみれば明らかであろう。本来の役目を果たしていない art, body, religion を “circle” で統合しようというウェストの試みは、世界に「秩序」(order) を求めようとする意志に等しい。また、この小説そのものが “circular structure” を内包していることも、読み進めて行くうちに自らわかってくるだろう。<sup>(17)</sup>

Balso はそれでも気分が晴れずに、誰かいないかと大きな声を上げると、“Tours” と縫い取りした帽子をかぶっている男が姿を現わす。そのガイドは、Balso のことを “the inventors and perfectors of the automatic watercloset” の国からの使者だと皮肉るが、Balso はこれに対して “Have you ever seen the Grand Central Station, or the Yale Bowl, or the Holland Tunnel, or the New Madison Square Garden?”<sup>(18)</sup> と、アメリカの誇る建築物で応答する。このやり取りには、ウェスト独特の materialism と Western Civilization への satire を見い出すことができる。

Balso はガイドの話聞きながら大腸の中を進み、ヘルニアの部分指摘し、Hernia Hornstein に始まるユダヤ人の名前を羅列すると、ガイドは突然怒り出したように、“I am a Jew! and whenever anything Jewish is mentioned, I find it necessary to say that I am a Jew. I’m a Jew! A Jew!”<sup>(19)</sup> と大声を張り上げる。驚いた Balso は、自分は anti-Semite ではない、ユダヤ人の友人もいるし、むしろ賞讃しているぐらいだ、と言っ

てガイドをなくさめる。

ウェストが、自分がロシア系ユダヤ人の2世であることに悩み苦しんだ末、非ユダヤ人を装い、大学のキャンパスにおけるユダヤ的活動には全く関与しなかったことはよく知られているが、ここでガイドの男に、敢えて“I am a Jew!”とアイデンティティーを明らかにさせたのは、ウェスト自身の中の、ユダヤ人を嫌悪しつつもそこから抜け切れない ambivalent な心の動きであろう。さらに、Balso のエリをつかんで離そうとしないガイドから、「乱暴にからだをひねって」「with a violent twist」逃がれようとしたのは、エピグラフに掲げられた“life is a journey”の出発点において、「ユダヤ人であること」から逃がれようとする必死の試みであった、と言えよう。しかしそれにも抱わらず、ウェストがいくらかもこうと、生活において非ユダヤ人を演ずることはできても、究極的に見て、芸術（作品）まで偽ることはできなかったのである。

かろうじてガイドと別れることができた Balso がトンネルのなかを走って行くと、ひとりの妙な男に出会う。男は、「裸で頭の上だけに茨が突きささった山高帽をかぶり、画鋲で自分の身体を十字架に張りつけようと苦心している。」「(“naked except a derby in which thorns were sticking, who was attempting to crucify himself with thumb tacks”<sup>(20)</sup>) 男は“Maloney the Areopagite”と名のり、“a catholic mystic”であると自己紹介する。彼は、「健全な肉体には神は宿らない」と信じ、自らを苛めているわけである。さらに、Saint Puce の伝記を書こうと決心したところだという。St. Puce とは、「イエスの腋の下で生まれて死んだノミ」のことである。 (“A flee who was born, lived, and died, beneath the arm of our Lord.”<sup>(21)</sup>) この St. Puce に関する Maloney の話は、明らかに Christianity そのものを揶揄したものであるが、同時にまた、ウェストの「肉体」への執着も感じられる。<sup>(22)</sup>

St. Puce は、生きている間にイエスの身体をくまなく探索し、その冒険を“A Geography of Our Lord”という作品にまとめ、イエスが十字架に掛けられると、彼もそのあとを追って殉死する。Maloney はしきりにこの

ような St. Puce の生きざまを熱っぽく語るが、Balso は相手にせずに、“I think you're morbid. . . Play Games. Don't read so many books. Take cold Showers, Eat more meat,”<sup>(23)</sup> といった相手をからかうような忠告をして、その場を立ち去る。Balso は、この後も夢の世界の eccentric な体験を重ねながら、木馬の胎内という「空間」をあてどなくさまようのである。

### Notes

- (1) Jay Martin, *Nathanael West: The Art of His Life* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1970), p. 85.
- (2) J. Martin は、Surrealism と同じようにドイツの Expressionism のウェストに与えた影響をも忘れてはならない、と忠告している。ウェストは、Kafka の翻訳を読み、Brecht のことも知ったが、ドイツ語がわからずに美術により親しみを持ったようである。とりわけ Max Ernst に多くを学んだらしい。  
Martin, p. 82.
- (3) Nathanael West, “Through the Hole in the Mundane Millstone,” William White, *Nathanael West: A Comprehensive Bibliography* (Oberlin: Kent State Univ. Pr., 1975), pp. 129-30.
- (4) もっとも、このような類いの評価もかなり固定している。例えば Malcom Bradbury は、Surrealism の影響下にある作家として、Henry Miller と共にウェストを挙げ、“... whose (West's) apparently eccentric work proves now to belong firmly in the tradition of American comic grotesquerie, . . .” と述べている。  
Malcom Bradbury, *The Modern American Novel* (Oxford, New York: Oxford Univ. Pr., 1984), p. 121.  
或いは、ウェストをアメリカにおける black humor の先駆者的存在とする見解もある。Brom Weber は “The Mode of ‘Black Humor’” と題する論の中で、“Of all the young American avant-garde writers influenced by the dadaist-surrealist ferment in the 1920's, only one—Nathanael West—managed the feat of creating an extended work of black humor.” と書いている。Brom Weber, “The Mode of ‘Black Humor,’” *The Comic Imagination in American Literature* ed. Louis D. Rubin, Jr. (New Jersey: Rutgers Univ. Pr., 1973), p. 366.

更に、ウェストは晩年の1939年、最後の小説 *The Day of the Locust* を書いたさいにも、George Milburn に当てた手紙の中で、自分の小説があまり大衆受けしないことにいら立ちつつも、“I do consider myself a comic writer,…” と自らの立場を確認するように強調していることも興味深いものがある。

Martin, p. 335.

- (5) Notes (3)に同じ。pp. 130-1.
- (6) Martin, p. 125.
- (7) *Ibid.*, p. 129.
- (8) *Ibid.*, p. 142.
- (9) Alfred Kazin の *On Native Grounds* では、かなりのページ数が Cabell のために割かれている。Cabell への讃辞を引用してみる。「メンケンにとって、キャベルは『白痴的信仰と愚かな熱狂と信じがたいほどの不条理の時代』を救った作家であり、ウォルター・ペイターとホラス・ウォルポールを思いおこさせる作家であった。『ついに』とソルボンヌ大学教授は勝ちほこった調子でのべた、『ついに、教養と自らのスタイルを持ったアメリカの小説家が出現した。はっきりした自覚をもつ芸術家、作家が出現した。……ついに、われわれはセオドア・ドライサーの平凡、シンクレア・ルイスの野蛮、アンダソンの神秘的などもりなどから解放された……ついに、自由にものを考え、詩学を無視しないアメリカの作家が出現した……ありがたいことに、『ジャーゲン』が一九一九年に生まれ、想像力の権利が回復されたのだ。」アルフレッド・ケイジン著「現代アメリカ文学史」（杉木喬・大橋健三郎他訳。南雲堂、1964年）pp. 265-6.
- (10) Stanley Edgar Hyman, *Nathanael West* (Minneapolis: Univ. of Minnesota Pr., 1962), p. 7.
- (11) Randall Reid, *The Fiction of Nathanael West: No Redeemer, No Promised Land* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1967), p. 15.
- (12) エピグラフの分析については、J. Martin を参照した。また、David D. Galloway も同様に「旅の終りに究極的な真実の発見がない」ことを指摘している。
- “Employing the picaresque technigue in his first novel, West satirizes the classic myth of ‘revelation’ which the technigue has traditionally illustrated. Balso, the itinerant hero, begins his journey by entering the anus of the Trojan Horse, but unlike Odysseus, Dante and Ishmael, there is no discovery of ultimate truth awaiting him at the end of his voyage.” David D. Galloway, “A Picturesque Apprenticeship: Nathanael West’s *The Dream Life of Balso Snell* and *A Cool Million*,” *Nathanael West: A Collection*

---

of *Critical Essays* ed. Jay Martin (New Jersey: Prentice-Hall Inc., 1971), p. 33.

- (13) “The Trojan horse suggests not epic—West summarized his plans in 1924 as a ‘parody’ of the Troy story—but deception, the deceitfulness of dreams, and thus of the life that these dreams symbolize.”  
Martin, p. 127.

- (14) “a symbol of delusion and sham, a crucial sign of his difference from his creator” Martin, p. 325.

また James F. Light によれば、心理学者ユングは、馬、とくにトロイの木馬を “a maternal symbol” と見なし、その中に入ることは「再生への望み」(“a wish to be reborn”) を示すようである。

James F. Light, *Nathaniel West: An Interpretative Study* (Ann Arbor, Michigan: Northwestern Univ. Pr., 1963), p. 53.

- (15) Nathanael West, *The Complete Works of Nathanael West* (New York: Octagon Books, A Division of Farrar, Straus and Gioux, 1978), p. 352.

- (16) Irving Malin, *Nathanael West's Novels* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois Univ. Pr., 1971), p. 12.

- (17) Ezra Greenspan は、circle は Balso の “spiritual symbol” だと述べている。“Balso’s journey through the horse is essentially a search for order, for a principle of unity in life. The circle is his spiritual symbol, and the vulgar song of his composing, . . . is his anthem.” *The Schlemiel Comes To America* (Metuchen, N. J., & London: The Scarecrow Press, Inc., 1983), p. 81.

art, body, religion のなかで、画家ジョットにのみ “Perfect Circles” (「完全な円」) とあるのは、ウエストの作家 (artist) としての意気込みの表われであらうか。

- (18) West, p. 6.

- (19) *Ibid.*, pp. 7-8.

- (20) *Ibid.*, pp. 9-10.

Victor Comerchero は、このような表現方法は、異なったイメージ (the sublime and the ridiculous) を結びつけ、anticlimax の効果を与える “the surrealist art of incongruity” と述べている。

*Nathanael West: The Ironic Prophet* (Seattle and London: Univ. of Washington Pr., 1964), p. 56.

これに対して R. Reid は、“the surrealist art of incongruity” ばかりではなく、“comic congruity” でもあるとしている。また、フロイトによると帽子は “phallus” を象徴しているという。Reid, p. 20.

(21) West, p. 11.

ウェストの Brown 大学時代 (1924年 6月), 彼の友人 Quentin Reynolds が困って Class Day Speech の原稿をウェストに頼み, 彼が書いたのがこの St. Puce の話しである。Quentin はウェストのおかげでスピーチがうまくいったらしい。この年の夏ウェストは, 友人 John Sanford に *Balzo Snell* の荒筋を語って聞かせたという。従って, *Balzo Snell* は完成まで 6年かかったことになる。Martin, pp. 72-3.

(22) "This morbid, wild story again reflects Balzo's obsessive concern with the body." Malin, p. 14.

(23) West, p. 13.

※ *Balzo* のつくった歌の訳は佐藤健一氏のを参照させて頂いた。(近畿大学教養部研究紀要 第5巻1号 1973年7月発行)